

令和四年度 卒業証書授与式 励ましの言葉

『春雷 巢立ちの 響きなり』（繰り返す）

（先日、夜明け前に、春の雷が鳴った際に、今日の
日を想い詠んでみました。）

本日ここに、富田林市長 吉村 善美 様をはじめ、
多くの来賓の皆さまをお迎えし、本校、令和四年度卒
業証書授与式を挙行できますことは、何よりも嬉しく、
またありがたい事と存じております。

高い所からではございますが、まず以って、御礼申
し上げます。本当にありがとうございます。

さて、卒業生の皆さん 卒業おめでとう！

先ほど、皆さん方、一人一人に卒業証書をお渡しす
事ができました。その卒業証書は、皆さんが六年間、
一生懸命努力し、小学校のすべての課程を修了したこ
との証しであります。

しかしながら、この六年間、自分の力だけで小学校に通えたのではないということも、忘れないで欲しいと思います。

自分を、今日まで育ててくれた保護者の方々をはじめ、家族の人々、また、お互いに切磋琢磨、助け合い、支え合って生活してきた多くの仲間、優しく丁寧に、時には厳しく指導して下さった先生方、そして、いつも温かい声とともに、登下校を見まもっていたいただいた「地域みまもり隊」の方々をはじめ、喜志小校区にお住まいのすべての方々、多くの人々に助けられ、導かれて、ここまで歩んでくることができましたのです。

「自分という人間は、決して自分一人の力だけで生きて来られたのではない。」

このことをあらためて皆さんとともに、確認したいと思います。

さて、みなさんにたくさんお伝えしたい事がありますが、今日は、一つに絞ってお話したいと思います。

お話の題名は、『十四番目の月』です。

お天気之夜、見えるはずの月が見えない、この状態を新月とって、これが0番目となります。ここから少しずつ丸くなって、いわゆる満月、これが十五番目なのです。そして、満月の一つ手前、これが十四番目となるわけです。荒井由実さん、現在は松任谷由実さんの『十四番目の月』というタイトルの歌には「次の夜から欠ける満月より、十四番目の月が一番好き」という歌詞があります。

皆さんが演じたミュージカル、本番当日、つまり十五番目の月（満月）は、本当に素晴らしく、観ているものすべてを感動させました。しかし、「さあ、明日はやるぞ」という意気込みと、「これで練習することはもうないんだなあ」という寂しさが相まっていた本番前日、そう『十四番目の月』の姿に、何とも言えないもの、そしてうらやましさすら、私は感じていました。

これからの人生、実にさまざまなことが起こるでしょう、そして多くのことを創っていかれることでしよ

う。もちろん、いつもうまくいくとは限りません、困難なことにも出会うでしょう。冒頭に読んだ、『春雷 巢立ちの 響きなり』には、そのような意味も含まれているのです。でも大丈夫。『十四番目の月』をみんなで見える日が、きっとやってきます。それが見えたら、もう本番の満月を楽しむだけです。

「さあ、やってみよう！」これからも『十四番目の月』をめざして・・・

後になりましたが、保護者の皆さま、お子様のご卒業誠におめでとうございます。立派な姿を前に、感慨もひとしおの事でしょう。また今日まで、本校教育活動に多大なるご理解ご協力を頂きました。あらためて御礼申し上げます。ありがとうございました。

なお、たいへん厚かましいお願いではございますが、今後とも地域のみなさまとともに、本校ならびに本校教育活動にご支援ご協力を、更には喜志小校区、ふるさと喜志の振興に向けてご理解ご尽力賜りますよう、

よろしくお願い申し上げます。

卒業生の皆さん。いよいよ、4月から中学生ですね。

先日、本校卒業生で、おととい喜志中学校を卒業した、みなさんの先輩たちに「中学校生活で絶対やっておかなければならないことは何ですか」と尋ねました。すると、「まずは、友だちをつくることです。更には、本当の友だちをつくることです。本当の友だちは、あかんことはあかん」と止めてくれます。「次に勉強することです。勉強が分からなくなるのが一番つらく、学校が楽しくなくなる最大の原因です。」このようにしつかりと答えてくれました。

さあ、これからも健康には充分留意し、仲間とつながり、充実した生活を送ってくれることを願い、私からのお祝のことばといたします。

令和五年三月十六日

富田林市立喜志小学校長

塩野 義和